

『論語正義』訳注:「先進篇第十一」(三)

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-05-10
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 平木, 康平
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004573

· 論語正義』訳注

― 「先進篇第十一」(三)

平木康

平

として重んぜられた。『論語正義』は、清末の劉寶楠が清朝考証学の成果を織り込んで書かした、『論語』の注釈を取捨選択し、『論語集解』にまとめ上げた。著わした、『論語』の新しい注釈である。三国・魏の何晏は、漢代

以前の『論語集解』などは「古注」と称されるようになる。『論語めて、『論語集注』を編んだ。これが、いわゆる「新注」で、それ内容を疎かにしていると考えた。そこで北宋以来の新しい儒学、い内容を疎かにしていると考えた。そこで北宋以来の新しい儒学、い内容を疎かにしていると考えた。そこで北宋以来の新しい儒学、い内容を疎かにしていると考えた。そこで北宋以来の新しい儒学、い内容を疎かにしていると考えた。

集注』はその後、元・明・清代を通じてもっとも広く普及し、儒学

時として本来の趣旨を曲げる無理な解釈が施された。をみずからの思想に引きよせて体系的に理解しようとしたために、入門の基本テキストとしてはなはだ尊重された。しかし、『論語』

「新注」のそうした流れを批判し、その欠点を正そうとしたのが、

ろか、「古注」にも捉われない独自の解釈も、時には提出された。を活かし、「新注」に捉われない新しい解釈が施された。それどこ価され、明末以来の「実事求是」をスローガンとする考証学の蓄積劉寶楠の『論語正義』である。そこでは何晏の『論語集解』が再評

えたもので、文責は平木にある。本訳注は、本田濬・神楽岡昌俊・衣笠勝美・山口澄子の各氏と平本訳注は、本田濬・神楽岡昌俊・衣笠勝美・山口澄子の各氏と平本訳注は、本田濬・神楽岡昌俊・衣笠勝美・山口澄子の各氏と平

阪青山短大国文第十三号」(平成九年二月)にそれぞれ掲載された。二十三号」(平成九年三月)に、「先進篇第十一」(二)は、「大すでに「先進篇第十一」(一)は「大阪青山短期大学研究紀要第すでに「先進篇第十一」(一)は「大阪青山短期大学研究紀要第

凡例

本稿は、その後を承けるものである。

一 原文は南青書院本(『皇清經解』所収)を底本とした。

『論語』本文の字体は原則として、底本の通りとした。

一 訳文・注では常用漢字体を使用した。

のは出来るだけ出典を明らかにし、()の中に示した。一 『正義』に引用されている文の中で、典拠が示されていないも

本と異なる場合や、不足する場合は、()の中に示した。『正義』に引用されている文の中で、典拠の書名や篇名が通行

ものを除いて割愛した。 引用文中の文字の異同は、明らかな誤字や解釈に支障を来たす

| 原文は適宜区切り段落分けを行った。

注は本文中に*印を付し、各章の後に記した。

簡単な注は訳文中に ()を用いて記した。

*前稿「先進篇第十一」(二)(大阪青山短大国文第十三号)にお

いて、第六章が脱落したため、本稿のはじめに第六章をおく。

第六章

[論語本文] 南容三復白圭。

[何晏・劉寶楠解] 南容 三たび白圭を復す。

玷けたる、尚ほ磨くべきなり。斯の言の玷けたる、爲むべか[注]孔(安國)日く、『詩』(「大雅・抑」)に云ふ、「白圭の

らざるなり」と。南容 詩を讀みて此に至り、三たび之を反

覆す。是れ其の心は言を愼むなり。

[論語本文] 孔子以其兄之子妻之。

[何晏・劉寶楠解]孔子 其の兄の子を以て之に妻す。

に三復と稱するなり。(『史記』)「仲尼弟子列傳」に、「三復白「正義」に曰く、古人「數の多きを言ふに、三より始む。故に此

圭之玷」と。「之玷」の二字多し。當に古論に出づべし。

『大戴禮』「衞將軍文子篇」に、「獨り居りては仁を思ひ、公言と五」と「是五」の二字多し、當に古論に出つべし。

と。盧辯注に、「兄の子を以て之に妻すを謂ふなり」と。 しては義を言ふ。其の『詩』を聞くや、一日 三たび白圭の玷を復 三たび復すと言ふは、猶ほ子路の終身 之を誦するがごときなり す。是れ南宮縚の行ひなり。夫子(其の仁を信じ、以て異姓と爲す」 一日に

謹むこと知るべし」と。 (子罕篇)。 張栻『論語解』に、「言を謹むこと此くの如くんば、 則ち行ひを

注「詩云」より「言也」に至るまで。

ざるなり。 今『詩』は玷を叚りて乩と爲す。玷は玉に瑕有ると訓じ、缺と訓ぜ 缺なり。刀に從ひて占聲。詩に曰く、白圭の乩」と。義は毛と同じ。 り。毛傳に云ふ、「玷は缺なり」と。『説文』(刃部)に、 「正義」に曰く、「詩に云ふ」と稱するは、大雅「抑」篇の文な 「別は

四語を復す。而るに注に云ふ、詩を讀みて此に至るに、三たび之を 「爲むべからざる」とは、爲は治なり。南容 一日に三たび此の

反覆す」とは、是れ初めて讀みし時に據りて言ふなり。其の後

遂

之を解す。

に日に誦して以て戒めと爲すなり。

第十五章

[論語本文] 子日、 由之瑟、奚爲於丘之門。

[何晏・劉寶楠解] 子曰く、

由の瑟、

奚爲れぞ丘の門に於いてせん

[注] 馬 (融) 曰く、子路 瑟を鼓して、雅・頌に合はず。

[論語本文]門人不敬子路。子曰、由也升堂矣。未入於室也。

[何晏・劉寶楠解]門人 子路を敬せず。子曰く、 未だ室に入らざるなりと。 由や堂に升れり。

馬曰く、我が堂に升れり。未だ室に入らざるのみ。門人 せず、孔子の言を「子路を賤しむと爲すと謂へり。故に復た

解

注

り。忿を懲らし欲を塞ぐ所以にして人を正すの徳あり」と。 正義」に曰く、 『白虎通』「禮樂篇」に、 「瑟は嗇なり、 郭璞 閑な

言ふ、「今の瑟は長さ五尺五寸」と。皆な是れ古制に依仿し、畫一廣さ一尺八寸、二十五弦。而るに『風俗通』(「聲音・瑟」)又た郭注と同じ。惟だ二十三弦のみ郭と異なる。頌瑟の長さ七尺二寸、と。邵氏晉涵『(爾雅)正義』引く『禮圖』は雅瑟の廣さ・長さは『爾雅』に注して云ふ、「長さ八尺一寸、廣さ一尺八寸、二十七弦』

なる能はず。

職へと爲すなり。 皇(侃)本「由之鼓瑟」に作るは、注に因りて誤衍するが似し。 皇(侃)本「由之鼓瑟」に作るは、注に因りて誤衍するが似し。

和にして中に居り、以て生育の氣に象り、憂哀悲痛の感、心に加は侍す。孔子曰く、『求や、爾 奚ぞ由に謂はざる。夫れ先王の音を執りて以て本と爲す。生に務めて以て基と爲す。流れて南に入り、北制するや、奏して聲に中れば節に中ると爲す。流れて南に入り、北制するや、奏して聲に中れば節に中ると爲す。流れて南に入り、北制するや、奏して聲に中れば節に中ると爲す。流れて南に入り、北制するや、奏して聲に中れば節に中ると爲す。故に其の善者り。孔で説苑』「修文篇」に、「子路 瑟を鼓するに北鄙の声有り。孔

注「子路鼓瑟不合雅頌」。

『由の過ちを改むるなり』」と。

此れ子路 瑟を鼓して夫子 之を責むるの事を相傳ふ。

「正義」に曰く、「雅・頌」とは音を以て言ふ。『史記』「孔子

頌の音に合せんことを求む」と。また『樂書』(未見)に云ふ、世家」に「詩三百五篇、孔子 皆な之を弦歌し、以て韶・武・雅・

皆な雅・頌なり」と。 ・頌は以て心を養ふ。聲・應 相保ち、細・大 踰えず、人をして・頌は以て心を養ふ。聲・應 相保ち、細・大 踰えず、人をして「樂の雅・頌は、猶ほ詩の威儀のごとし。威儀は以て身を養ひ、雅

経「公側襲受玉于中堂。與東楹之間」の疏には、表現は異なるが*『儀禮』「聘禮」疏には、引用文と全く同一の文は見えないが、

第十六章

同じ趣旨の文は見える。

[論語本文] 子貢問、師與商也孰賢。子曰、師也過。商也不及。

師や過ぎたり。商や及ばずと。[何晏・劉寶楠解]子貢問ふ、師と商と孰れか賢れると。子曰く、

[注]孔日く、倶に中を得ざるを言ふ。

[論語本文] 曰、然則師愈與。子曰、過猶不及。

を成さずして曰く、(「先王の禮を制するや」)敢て過ぎざるなりの禮を制するや」)敢て及ばずんばあらずと。子夏は琴を彈じて聲子に見ゆるを觀るに、子張は琴を彈じて聲を成して曰く、(「先王

案ずるに、鈍敏とは氣質を以て言ふ。子張と子夏と喪を除きて孔

「何晏・劉寶楠解」 曰く、然らば則ち師「愈れるかと。子曰く、過

[注]愈は猶ほ勝のごときなり。

「正義」に日く、皇本「問」下に「日」字有り。

「賢」下に「乎」

字有り。「過猶不及」下に「也」字有り。

注「言倶不得中」。

「正義」に日く、(『禮記』)「仲尼燕居」に云ふ、「子日く、『禮なるかな禮。夫れ禮は中を制する所以なり』と」と。子田く、『禮なるかな禮。夫れ禮は中を制する所以なり』と」と。子貢 席を越えて對のです。正義」に日く、(『禮記』)「仲尼燕居」に云ふ、「子日く、「正義」に日く、(『禮記』)「仲尼燕居」に云ふ、「子日く、「正義」に日く、(『禮記』)「仲尼燕居」に云ふ、「子日く、「正義」に日く、(『禮記』)「仲尼燕居」に云ふ、「子日く、「正義」に日く、(『禮記』)「仲尼燕居」に云ふ、「子田く、「正義」に日く、(『禮記』)「仲尼燕居」に云ふ、「子田く、「正義」に日く、(『禮記』)「仲尼燕居」に云ふ、「子田く、」

りて補う)。見るべし。

と(『禮記』「檀弓」上。括弧内の「先王の……」は「檀弓」によ

の中を民に用ふ」を引く。明らけし、過と不及とは皆な失する所有の中を民に用ふ」を引く。明らけし、過と不及とは皆な失する所有下には即ち「顏子の中庸を擇び」、「堯・舜の其の兩端を執りて其知れり。賢者は之に過ぎ、不肖者は及ばざるなり」と(*)。其の知れり。賢者は之に過ぎ、不肖者は及ばざるなり」と(*)。其の中を民に用ふ」を引くがするなり。

いる。劉寶楠の記憶違いか。…」であり、『論語正義』では「明」と「行」とが入れ替わって来『中庸』原文は「道の行はれざるや……道の明らかならざるや…

第十七章

[論語本文]季氏富於周公。而求也爲之聚斂、而附益之。

[何晏・劉寶楠解] 季氏 周公より富む。而るに求や之が爲めに聚

斂し、之に附益す。

[注]孔(安國)日く、周公は天子の宰、卿士なり。冉求は季氏の

宰爲りて、之が爲めに賦税を急にす。

[論語本文] 子曰、非吾徒也。小子鳴鼓而攻之可也。

して之を攻めて可なりと。

[何晏・劉寶楠解] 子曰く、吾が徒に非ざるなり。

小子

鼓を鳴ら

を聲にして以て之を貰むるなり。 [注]鄭(玄)日く、小子とは門人なり。鼓を鳴らすとは、其の罪

周公より富むと。

周公より富むと。

周公より富むと。

の一を過ぎず。自後、宣公、畝に税して、已民より取るの制は、什の一を過ぎず。自後、宣公、畝に税して、已民より取るの制は、什の一を過ぎず。自後、宣公、畝に税して、已民より取るの制は、什の一を過ぎず。自後、宣公、畝に税して、已

は千乘に至る」と。此れ季氏の富めるを知るべきなり。注に、「時に季氏の邑(正義原文「邑」下に「宰」字あるは衍す)注に、「時に季氏の邑(正義原文「邑」下に「宰」字あるは衍す)。(春秋)公羊(傳)』定(公)八年に或ひと曰く、「千乘の主

聚斂とは『説文』に「聚は會なり」(似部)。「斂は収なり」

て可なり』」と。趙岐注に「季氏は魯卿の季康子なり」と。

案ずるに、『左(傳)』哀(公)十一年傳に、「季氏(左傳原文

95 『論語正義』訳注

> 訓義(並びに同じ。胡氏紹勳『(四書)拾義』(未見)に聚字を解 (支部)と。『爾雅』「釋詁(下)」に「斂は聚なり」と。二字の 禮に度る。施すには其の厚きに取り、事とするには其の中を舉げ、

して驟と爲し、斂聚を急にすと謂ふ。亦た一解に備ふ。 『大學』に引く孟獻子曰く、「其の聚斂の臣有るよりは、

臣有らん」と。其の下に言ふ、「國家に長たりて財用に務むるには 必ず小人に自る」と。小人とは即ち聚斂の臣を指す。 寧ろ盗

同じ。 有り。附益の法を設く」と。亦た徴税の厚きを謂ふ。 附益と言ふは、『説文』(土部)に「坿は益なり」と。 『漢書』「哀帝紀」(*)に、 此に求と云ふは、冉有の名なり。季氏(富めり。而るに求 「武(帝)に衡山・淮南の謀 附は坿と

孔子曰く、求や吾が徒に非ざるなり。小子 鼓を鳴らして之を責め て、能く其の徳を改むる無し。而るに粟を賦すること他日に倍す。 民の財を聚めて以て之に増すなり。増とは即ち附益の義なり。 『孟子』「離婁篇(上)」に、「孟子曰く、『求や季氏の宰爲り

る』と。仲尼

對へず。而して冉有に私きて日く、『君子の行ふや、 に訪はしむ。日く、『丘 知らざるなり』と。三たび發して卒に日 は「季孫」に作る)田を以て賦せんと欲し、冉有をして諸れを仲尼 『子は國老爲り。子を待ちて行はん。之を若何ぞ、子の言はざ

> すれば、又た何をか訪はんや』と。聽かず」と(*)。十二年に、 法らんと欲すれば、則ち周公の典 在り。若し苟にして行はんと欲 を以て賦すと雖も、將た又た足らざらん。且つ子季孫 若し行ひて 亦た足れり。若し禮に度らずして、貪冒(厭くる無くんば、則ち田 **斂むるには其の薄きに從ふ。是の如くなれば、則ち丘を以てするも**

私きて曰く、汝 先王の土を制するを聞かざるか。田に籍するに力 (『國語』)「魯語(下)」に此の事を載せて、 「仲尼 冉有に

「春王正月、田を以て賦す」と。

其の有無を量る。力に任ずるに夫を以てして、其の老幼を議す。是 に於てか、鰥寡孤疾有り。軍旅の出有れば則ち之に徴し、無くんば を以てして、其の遠邇を砥らかにす。里に賦するに入るを以てして、

則ち已む。其の歳収は田一井より稷禾・秉芻・缶米を出だす。是れ すれば、則ち周公の籍有り。若し(正義原文「苟」に作るは誤り) を過ぎざるなり。先王以て足れりと爲す。若し子季孫 其の法を欲

法を犯さんと欲すれば、則ち苟にして賦せよ。又た何をか訪はん」

て賦すと言ふは、今漢家 民に錢を斂むるに田を以て率と爲すが若 とは一井の田を謂ふ。賦とは斂なり、其の財物を取るなり。田を用 何休『公羊』(哀公十二年)注に「用田賦」を解して云ふ、 田田

て君に仕ふべく、可ならざれば則ち止むるを見す。亦た季孫の善言 る能はず。故に夫子深く之を責む。凡そ人臣爲るものは當に道を以 て賦すとは、自ら是れ季氏の謀にして、特だ冉子 其の事を救止す 預『左傳』を解して賦を以て軍制と爲すは誤りなり(*)。田を用 すること他日に倍すと。粟とは即ち財物なり。他日に倍すとは、畝 に税するの制に倍するなり。倍の言爲るは大略の辭なり。賈逵・杜 し」と。何は賦を解して財物と爲す。而して孟子以爲へらく粟を賦

鼓を鳴らすとは、鼓を撃ちて鳴らしむるなり。

を聞きて能く改悟するを冀ふなり。

皇本「而附益之」の「之」をば「也」に作る。 「鳴鼓」の下に

注 「周公天子之宰卿士」。 而」字無し。

する所の賦法を以て、季氏の失を正さんと欲するなり。故に此の文 の周公・召公は是れなり。此の注は然らざるを知るは、 に即ち周公より富むと言ひ、以て之を譏るなり。若し泛く天子の宰 ・外傳(*)皆な周公の典籍を舉ぐればなり。是れ夫子 周公の制 「正義」に日く、周公は魯に封ぜられ、元子 之を嗣ぐ。其の次 世よ采地を守り、王朝に官へて卿士爲り。春秋の時に稱する所 『春秋』内

季氏有りて、卿を世よにし政を專らにし、禄は公室を去り、攘奪克

注「鳴鼓聲其罪以責之」。

を指せば、便ち回遠爲り。且つ内・外傳の言ふ所の周公と合せず。

「正義」に曰く、 『左(傳)』莊(公)二十九年の傳に、 「凡そ

之を攻め、朱絲もて之を脅す。其の不義たるが爲めなり。此れ亦た 下の上を犯す、賤を以て貴を傷る。逆節なり。故に鼓を鳴らして 春秋の強禦を畏れざるなり(*)』と。董生の言を按ずるに、魯に なり。陰の陽を滅すとは卑の尊に勝つなり。日食も亦た然り。皆な 請ふのみ。敢て加ふる有る無きなり(*)。大水は陰の陽を滅する 壓するなり。固より其の義なり。大いに甚だしと雖も、拝して之を 十七年の傳に、「日之を食する有れば、天子は鼓を社に伐ち、諸侯 師に鐘鼓有るを伐と曰ふ」と。(『國語』)「晉語(五)」に「伐 に曰く、『大旱は陽の陰を滅するなり。陽の陰を滅すとは尊の卑を は鼓を朝に伐つ」と。杜注に謂ふ、天子は「羣陰を責め」、諸侯は には鐘鼓を備ふ。其の罪を聲にするなり」と。(『左傳』)昭(公) (支部) に「攻は撃なり」と。此に責と訓ずるは、引申の義なり。 「自ら責む」と。是れ凡そ責讓には多く鼓を用ふるなり。 宋氏翔鳳『發微(論語説義)』に云ふ、「『春秋繁露』(精華篇) 『説文』

97 『論語正義』訳注

> 賤の貴を傷りて、不義の至る者なるかな。季氏 - 聽く能はず。冉有 剝して、田を用て賦するの事有るを知る。是れ亦た卑の尊に勝ち、 深く冉有を疾むが若きも、實は季氏の惡を正さんとするなり」と。 救ふ能はず。厥の罪 惟れ均し。故に鼓を鳴らして攻めんとす。

そらくは従者の一人が、陽虎に言った言葉であろう。 に終わって郊に逃れ、軍装を解いて休んでいた時に、ある人、お 『公羊傳』定公八年の引用は、季氏を伐とうとした陽虎が不首尾

*『漢書』「哀帝紀」は、同「諸侯王表序文」の誤り。

*『左傳』哀公十一年に引く孔子の言「丘を以てするも亦た足れり」

れ賦の常法なり」といい、いわゆる「丘賦」のことと解する。あ は、杜預注では「丘十六井にして戎馬一疋・牛三頭を出だす。是

十分にやっていけます」と解することもできる。因みに丘賦は昭 るいは丘を孔子とし、「わたくし丘を登用して政治を行わせても

*賈逵と杜預との賦の解釈は以下の通り。「賈逵以爲へらく、一井 公四年、鄭の子産がはじめた。

詁』)。「丘賦の法は其の田財に因りて、通じて馬一疋・牛三頭 三頭を出ださしむ」(哀公十一年の疏に引く賈逵『春秋左氏傳解 の間をして一丘の税を出ださしめんと欲す。井の別に馬一匹・牛

を出ださしむ。今
其の田及び家財を別にして一賦を爲めしめん

軍旅に備えるためである。右に挙げた「丘を以てするも……」の と欲す。故に田賦と言ふ」(哀公十一年杜注)。牛馬を出すのは 一文はこの「田を以て賦す」のすぐ後にあり、杜注に「戎馬」の

*『春秋』内・外傳とは、さきに挙げた『左傳』および『國語』で 語がみえる。

*『春秋繁露』「精華篇」の引用中「敢て加ふる有る無きなり」は、 ある。

盧文弨の校では『續漢志』『文獻通考』にもとづき「敢て加ふる

*「強禦を畏れず」とは、筋の通らない暴力には屈しないことをい 有るなり(敢有加也)」とするのをよしとする。

『公羊傳』莊公十二年に「仇牧 彊禦を畏れざると謂ふべし」

とある。

う。

第十八章

[論語本文] 柴也愚。

「何晏・劉寶楠解」柴や愚。

注

弟子の高柴、字は子羔。愚とは愚直の愚。

[論語本文] 參也魯。

[何晏・劉寶楠解]參や魯。

[注]孔(安國)曰く、魯は鈍なり。曾子は性 遅鈍たり。

[論語本文] 師也辟。

[何晏・劉寶楠解]師や辟。

[注]馬(融)日ぐ、子張は才 人に過ぐ。失は邪僻にして過ちを 文るに在り。

[論語本文] 由也喭。

[何晏・劉寶楠解]由や喭。

[注]鄭(玄)曰く、子路の行、畔喭に失す。

「正義」に日く、此の節 亦た夫子の論ずる所にして、而るに

の俗字なり」と。

「子日」と署せざるは前の四科と同じ。

師や辟とは、『朱子集注』に「辟とは便辟なり。容止を習ひて誠

億『羣經義證』に、「案ずるに、『墨子』に『再拝便僻』と(*)。 實少なきを謂ふ」と。案ずるに、便辟とは猶ほ盤辟のごとし。武氏

是れ便僻と再拝と文を連ぬ。即ち『漢書』〈何武傳〉に『舉ぐる所

の者を見れば、槃僻雅拝』といい、服虔曰く、『禮容の拝を行ふ』

して禮容を爲すのみ』と。盤も亦た便の轉なり」と。 〈儒林傳〉注に蘇林曰く、『張氏知らず。經に但だ能く盤辟に

云ふ、「孔子曰く、吾 容貌を以て人を取らんと欲するも、師に於 のごとく趨るは、子張氏の賤儒なり」と。『大戴禮』「五帝徳」に

案ずるに、『荀子』「非十二子」に云ふ、「禹のごとく行き、舜

てや、之を改む」と。皆な證すべし。

竊かに謂ふに愚・魯は狷に近く、辟・喭は狂に近し。故に夫子

之と禮樂に進むを願ふなり。其の後、四子は徳成り學立つ。故に子 衞の將軍文子に答ふるに、咸な其の美行を稱す(『大戴禮』

「衞將軍文子」)。

は、 「『説文』(言部)に「諺」有りて「喭」無し。「喭」は乃ち「諺」 皇本、「辟」を「僻」に作るは、此れ馬注に依りて誤改す。「喭」 『書』「無逸」疏は引きて「諺」に作る。阮氏元校勘記に、

注「弟子」より「之愚」に至るまで。

「正義」に曰く、(『史記』)「弟子列傳」に、「高柴 字は子 に 受く。 孔子以で愚と爲す」と。『集解』に引く鄭玄曰く、「衛人 に 見ゆ。(『禮記』)「壇弓」(上)は子皋に作る。皋は羔と同じ。に 見ゆ。(『禮記』)「壇弓」(上)は子皋に作る。皋は羔と同じ。に 見ゆ。(『禮記』)「壇弓」(上)は子皋に作る。皋は羔と同じ。に 見ゆ。(『禮記』)「壇弓」(上)は子皋に作る。皋は羔と同じ。に 見ゆ。(『禮記』)「増弓」(上)は子皋に作る。皋は羔と同じ。 で 八子り少きこと四十歳」に作る(*)。高は既に氏爲り。當に又た 『(孔子)家語』(「七十二弟子解」)は、「子高、齊人なり。孔子より少きこと四十歳」に作る(*)。高は既に氏爲り。當に又た 『本子以の長と爲すべし。

注「魯鈍也」。

「愚直」とは、古の愚者や直なるが如きを謂ふなり(陽貨篇)。

なればなり』と(樸鈍の鈍、漢魏叢書本・四部叢刊本は魯字に作《釋州國)に曰く、『魯は魯鈍なり。國に山水多く、民の性 樸鈍公十五年)に『魯人以て敏と爲す』と。鈍人を謂ふなり。『釋名』(文『論語』に曰く、『慈や魯』」と。段氏玉裁注に、「『左傳』(文『正義』に曰く、『説文』(白部)に云ふ、「魯は鈍の詞なり。

注「子張才過人失在邪僻文過」。

る)。案ずるに、椎魯・鹵莽は皆な即ち此れなり」と。

にして、過ちを文るは、乃ち小人怙惡の行にして、以て子張に儗ふ作る(論語正義原文「辟」字を「僻」字に作るは誤り)。但だ邪僻「正義」に曰く、注は僻を以て辟を釋す、是に非ず。經文善辟に

注「子路之行失於畔喭」。

べからず。

に云ふ、「乃ち逸乃ち諺」と。『僞孔傳』(孔安國書傳)に、「叛『釋文』見る所の本は並びに「昄喭」に作る(*)。『書』「無逸」「正義」に曰く、「『(經典)釋文』に「畔喭」と云ふ。皇本・

諺とは不恭なり」と。叛諺は畔喭と同じ。

は『然く畔換する無かれ』に作る。『文選』〈魏都賦〉に云ふ、じめ通行本には「武強」二字の連句なし〉。『漢書』〈敘傳〉注に詩』に云ふ、『武強なり』と(『韓詩外傳』をいうか。四部叢刊は援する無かれ』と。〈箋〉に云ふ、『畔援とは跋扈なり』と。『韓援氏循『論語補疏』(*)に、「『大雅』〈皇矣〉に、『然〈畔焦氏循『論語補疏』(*)に、「『大雅』〈皇矣〉に、『然〈畔

と(文選原文には「叛」字なし)。換・援・諺、聲近く相通ず」と。『雲撤して叛換す』と。劉淵林注に、『叛換は猶ほ睢のごときなり』

[論語本文] 子曰、回也其庶乎、屢空。賜不受命而貨殖焉。億則屢

中。

して貨殖す。億れば則ち屢しば中る。[何晏解]子曰く、回や其れ庶きか。屢しば空し。賜や命を受けず

けずして貨殖す。億れば則ち屢しば中る。[劉寶楠解]子曰く、回や其れ庶はんか。屢しば空し。賜や命を受

[注] 言ふこころは回 聖道に庶幾し。數しば空匱すと雖も、集した。 こときなり。聖人の善道を以て數子の庶幾に教ふ。猶ほ道をごときなり。聖人の善道を以て數子の庶幾に教ふ。猶ほ道をごときなり。聖人の善道を以て數子の庶幾に教ふ。猶ほ道をごときなり。聖人の善道を以て數子の庶幾に教ふ。猶ほ道を可るに至らざる者、各おの内に此の害有り。其の庶幾に於て、知るに至らざる者、各おの内に此の害有り。其の庶幾に於て、知るに至らざる者、各おの内に此の害有り。其の庶幾に於て、知るに至らざる者、各おの内に此の害有り。其の庶幾に数と、襲しば空匱すと雖も、樂した。

ざる所以なり、と。にして中る。天命に非ずと雖も、偶たま富む。亦た虚心なら然れども亦た道を知らざる者なり。理を窮めずと雖も、幸ひ

命を受けずしてを以て之に對觀すれば、蓋し命を受くるを指して言 くるがごときなり。若し夫れ命を官に受けずして、自ら其の財を以 語』「晉語八」)。鄭は則ち商人の一環も必ず以て君大夫に告ぐ に至りて、晉は則ち絳の富商あり。韋藩木楗 以て朝を過ぐ(『國 度量純制は官に掌らる。貨賄の璽節は官に掌らる。下りて春秋の世 と。『周禮』(質人など)を以て之を考ふるに、質劑は官に掌らる。 れを三官に屬せしむ。農は粟を攻め、工は器を攻め、賈は貨を攻む」 故に『呂氏春秋』〈上農篇〉に曰く、『凡そ民の七尺より以上は諸 は夫子に學ぶ。而るに又た貨殖す。命を受けざるに非ずして何ぞや。 業とする所は以て命の受くる所と爲すこと、此くの如きなり。子貢 民 各おの其の業を習ひ、未だ兼ねて之を爲す者有らず。凡そ其の ふ」と。案ずるに、蘇説 是なり。命とは禄命を謂ふなり。古は四 庶きかなとは、未だ明らかに庶き所の若何なるかを指さず。下文の (『左傳』昭公十六年「韓起」の記述)。 蓋し猶ほ皆な命を官に受 兪氏樾『(羣經)平議』に、「古は商・賈は皆な官 之を主る。 「正義」に曰く、蘇氏秉國『四書求是』(未見)に云ふ、 「其れ

101

て、首めに子貢を列す。開く有れば必ず先づ在り。子貢 固より得陶朱・白圭の徒、此れ由り起こるなり。太史公 貨殖を以て傳を立貨殖と日ふ。子貢は聖人の高弟なるを以てして、亦た復た之を爲す。貨殖すと謂ふ。『管子』〈乘馬篇〉に日く、『賈は賈の貴賤を知り、て賤きを市ひ高きを鬻り、什一の利を逐へば、是れ命を受けずしてて賤きを市ひ高きを鬻り、什一の利を逐へば、是れ命を受けずして

は、仍ほ聖道に庶幾きを謂ふなり。案ずるに、兪説。亦た理に近し。若し然らば、則ち其れ庶きかと

て辭せざるなり」と。

貨殖すとは、貨材を書きて以て生殖するを謂ふなり。上)」に、「財「蕃殖す」と。韋昭解に、「殖は長なり」と。子『廣雅』「釋詩」に、「殖は積なり」と。(『國語』)「周語

億は度なり。皇本「億」をば、「憶」に作る。『漢書』「貨殖傳、貨殖すとは、貨財を居きて以て生殖するを謂ふなり。

も義は同じ。・「漢陳度碑」(未詳)、引きて並びに「意」に作る。字は異なる

して陋巷に在り。子贛は駟を結び騎を連ね、束帛の幣もて諸侯を聘原文「七十子之徒」の下に「賜」字あり)。而るに顏子は簞食瓢飲貯を發き、財を曹・魯の間に鬻ぐ。七十子の徒に最も饒たり(漢書貯を發き、財を曹・魯の間に鬻ぐ。七十子の徒に最も饒たり(漢書

孔子の譏る所と爲す。是れ「意れば則ち屢しば中る」とは、即ち上述空し。賜や命を受けずして貨殖す。意れば則ち屢しば中る』」と。「以空し。賜や命を受けずして貨殖す。意れば則ち屢しば中る』」と。「」と、「」の 其れ庶幾きか。屢しすす。至る所の國君 庭を分けて之と抗禮せざる無し。然るに孔享す。至る所の國君 庭を分けて之と抗禮せざる無し。然るに孔

た云ふ、「子貢(善く意りて以て貨利を得たり」と。又時を得、故に貨殖して富多く、陶朱に比するを罪するなり」と。又ち屢しば中る。子貢の善く積を居き、貴賤の期を意り、數しば其のち讓しば中る。子貢の善く積を居き、貴賤の期を意り、數しば其の

の「貨殖」を受けて言ふ。

解す。此れ漢人の誼を解するの最も顯然として據るべき者なり。其の時數を得るもて「屢」字を解し、其の時を得るもて「中」字を

蓋し『論衡』は、貴賤の期を意るを以て「億」字を解し、數しば

命を受けざるを以て禄を辭すと爲す。「貨殖傳」の子貢 衛に仕ふ江熙曰く、「賜や濁世の榮(皇疏原文「禄」に作る)を受けず」と。皇疏に引く殷仲堪曰く、「矯君の命を受けず」と。(皇疏に引く)

と合せず。非なり。

注「言回」より「心也」に至るまで。

子、其れ殆んど庶幾はんか」と。道を庶幾ふを謂ふなり。た云ふ、「庶は幸なり」と。『易』「繋辭傳」(下)に、「顏氏の「正義」に曰く、『爾雅』「釋言」に、「庶幾は尚なり」と。又

に首陽に從はんとす』」と。是れ漢人 屢しば空しきを解して、皆母 病む。此の子 外に人事する無く、屢しば空し。將に孤竹の子らずと爲さず。孔子は容れられざるも、聖ならずと爲さず」と。『強漢(書)』「賈逵傳」に、「帝 馬防に謂ひて曰く、『賈逵のらずと爲さず。孔子は容れられざるも、聖ならずと爲さず」と。『強漢(書)』「賈逵傳」に、「帝 馬防に謂ひて曰く、『賈逵のらずと爲さず。孔子は容れられざるも、聖ならずと爲さず」と。長に、「空は窮なり」と。之を引申して、凡そ貧窮にして財無き者、事に首陽に從はんとす』」と。是れ漢人 屢しば空しきを解して、皆事に言陽に從はんとす』」と。是れ漢人 屢しば空しきを解して、皆事に言いた。

公卒す。孔子曰く、「賜や不幸にして、言へば中る。是れ賜をして皆な死亡有らん。君は主爲り、其れ先に亡せんか」と。是の歳 定財す。玉を執ること高く、其の容 仰ぐ。魯の定公 玉を受くるこ朝す。玉を執ること高く、其の容 仰ぐ。魯の定公 玉を受くるこれで、正を執ること高く、其の容 仰ぐ。魯の定公 玉を受くるこれを (本) といる (本)

ざらん」と。此れ明らかに事理を億度するを謂ふ。注説亦た本無きりて誼を設け、象類に依託す。或ひは億れば則ち屢しば中るを免れを推す者(漢書原文「陰陽を推し災異を言ふ者」に作る)、經に假案ずるに、『漢書』「眭宏等傳贊」に、「漢の興りて陰陽の災異多言ならしむる者なり」』と。此れ憶すれば中るの類なり」と。

『墨子』に「再拝便僻」の句は見えず。

*『孔子家語』「七十二弟子解」の引用、

四部叢刊はじめ通行本は

*

には非ず。

、『召員を見られば、『とき』「兄を」」)まって以をして言う。 に「子羔」に作る。劉寶楠のみたテキストがなんであるか未詳。

な空匱と爲す。注の前説 是なり。

考えて括弧を付した。實楠のみた『補疏』と現行『皇清經解』本と異なるか。文脈より*焦循『論語補疏』には「畔喭」に関する記述が見あたらない。劉

第十九章

[論語本文]子張問善人之道。子曰、不踐迹、亦不入於室。

【何晏解】子張 善人の道を問ふ。子曰く、迹を踐まず、亦た室に

[劉寶楠解]子張 善人の道を問ふ。子曰く、迹を踐まざれば、亦

を循追するのみならず。亦た少しく能く業を創む。(*)亦[注]孔(安國)曰く、踐は循なり。言ふこころは善人は但だ舊迹

た聖人の奥室には入らず。

徳を成すべし。諸れを室に入るには必ず陳涂・堂戸の跡を踐み、而徳を成すべし。諸れを室以てす。當に前言往行に效ひて、以て其の人は當に何れの道、以て自ら處すべきかを問ふなり。故に子 告ぐは、則ち何如にして以て善人と爲るべきかを問ふには非ず。乃ち善は、則ち何如にして以て善人と爲るべきかを問ふには非ず。乃ち善は、則ち何如にして以て善人と爲るべきかを問ふなり。故に子 告人の道を問ふと

る後に循循然として至るに譬ふるなり」と。

こ進みて、乃ち室こ入るべし。なり。善人は質「美にして、未だ學ばざるものなり。故に必ず禮樂なり。善人は質「美にして、未だ學ばざるものなり。故に必ず禮樂

案ずるに、孔説 是なり。迹を踐むとは、禮樂の事を學ぶを謂ふ

に進みて、乃ち室に入るべし。

『漢書』「刑法志」に、「孔子曰く、『如し王者有らば、

必ず世

け亂を撥めて起こる。民に被ぼすに徳教を以てし、變じて之を化し、に勝ち殺を去るべし』と(子路篇)。言ふこころは、聖王(衰を承にして而る後に仁たり。善人は國を爲むること百年にして、以て殘

然れども猶ほ百年にして殘に勝ち殺を去る」と。

必ず世にして而る後に仁道成る。善人に至りては室に入らざるも、

(述而篇)に、「聖人・善人は吾 未だ之を見るを得ず」と言ふ。「志」の此の言に據れば、善人を以て諸侯を指して言ふ。上篇

彼に言ふ善人の義も亦た同じきなり。

王者は徳教を以て民を化し、禮を制し樂を作り、功は太平を致す。

能はず。所謂(室に入らざるなり。漢志の云ふ所、義に於て亦た通ず。故に僅かに殘に勝ち殺を去るべし。仁道の如きは猶ほ未だ成す善人の如きは邦を爲むること百年にして、仍ほ禮樂の事を興す能は

(辵部)に、「迹は歩く處なり。蹟は或ひは足・責に從ふ。速は箍『(經典)釋文』に、「迹は、本善亦た跡に作る」と。『説文』ず。

文の迹。朿に从ふ」と。並びに跡に作らず。是れ跡は乃ち迹の俗な

[論語本文]子曰、論篤是與、君子者乎、色莊者乎。

[何晏・劉寶楠解]論の篤きもの是れか、君子者か、色莊なる者か。

注 論の篤きものとは、口に言を擇ぶ無きを謂ふ。君子者とは、 以て善人と爲すべし。 て小人を遠ざくるなり(*)。言ふこころは此の三者は皆な 身に鄙行無きを謂ふ。色莊なる者とは、惡まずして嚴に、以

故に同に一章と爲す。當に是れ時を異にするの語なるべし。故に別 「正義」に曰く、邢(畧)疏に云ふ、「此れ亦た善人の道なり。

及びて、言ひて善人に及び、見る所の論篤、君子、色莊の三者を舉 すのみ。或は「與」と言ひ、或は「乎」と言ふは、文法の變なり。 ども是に似て非なる者、其の間に與る有る容し。故に但だ疑辭を爲 げて以て之に當つ。蓋し此の三者は皆な之を善人と謂ふべし。然れ に『子曰く』と言ふなり」と。 案ずるに、夫子 善人は之を見るを得ずと言ふ (述而篇)。 此に

> 彼に「擇行」に作るは、敗行無きを謂ふなり(*)。 *孔安國注「少能創業」の句、四部叢刊所収の日本正平刊本はじめ 『孝經』の文を約するなり(*)。「擇」は「殬」と同じ。敗なり。

「正義」に曰く、「口に言を擇ぶ無く」、「身に鄙行無し」とは、

* 『易』「遯」に「君子以遠小人、不惡而嚴」とある。

「多少能創業」に作る本あり。

*「擇」「殬」ともに「敗」とする説は、王引之『經義述聞』 *『孝經』「卿大夫章」に「口無擇言、未無擇行」とある。

言」にもみえる。

擇